

令和8年度 第2回 岐阜市総合教育会議 議事録

- 1 日 時 令和8年7月27日（月） 13時30分～15時30分
- 2 場 所 市庁舎6階 6－1会議室
- 3 出席者 柴橋市長、伊藤委員、岡本委員、奥村委員、小森委員、益子委員
- 4 招聘者 島根大学 名誉教授 原 広治 氏
- 5 傍聴者 一般5名 報道1名
- 6 次 第 (1) 市長あいさつ
(2) 報告
(3) 協議
「子どもの発達と見取り」
- 7 議 事

(13時30分開会)

(1) 市長あいさつ

(2) 報告

(3) 協議

① 事務局説明

(資料2 子どもの発達と見取り)

② 招聘者講演（原 氏）

(資料3 特別支援教育における学びの保障について)

③ 意見交換

●奥村委員

今の子どもたちは自己肯定感が低いと感じている。小学校に入る頃には、ある程度そうした部分が固まってしまい、難しい状況になっているのではないと思う。おそらく、養護的な働きと教育的な働きのバランスが悪いのではないと思うが、その背景には、保護者が何をしてあげればいいのかわからないという状況もあり、その結果、習い事を沢山させることに偏ってしまったり、保育園や幼稚園に任せきりになってしまったり、本来取るべき対策とは別の行動をしてしまっていることもある。一方で、お母さん自身がずっと携帯電話を見ているような状況もあり、親子の関わりが十分ではないケースも見受けられる。そのような関わり方のバランスの悪さが、現在の子どもたちの姿として現れている部分もあるのかと思う。

これは特別支援教育だけの話ではなく、全ての子どもに当てはまることであるから、その対策をすることが不登校の子どもたちへの支援にもつながると思うのだが、学校の先生方全員がそのような視点を持っているわけではないように感じる。一般的に、先生方は特性に応じた支援が必要だと言われるが、何か問題があると病院へ行って診断を受けたり、検査を受けたりする流れになることが多い。毎日子どもと接している先生方は、その子の特性や必要なことを理解しているはずだが、それでも「この子にどう教えたらよいか」と先生方から相談を受けることがある。そういった状況の中、特別支援学級や通級指導などの支援について、医療機関の診断を求めて、支援学級に入れる、あるいは支援につなげるという方向で活用されている部分もあるのではないと思う。そういった現在の考え方について、どのように考えられているか教示いただきたい。

また、私が診てきた子どもの中には、現在は障がいを持ちながら成人になっている方もいる。特別支援学校に在籍する間は、子どもたちは守られる対象となるが、卒業すると本当に行き場がなくなってしまうこともあり、理想的な環境を子どもに用意してあげられないケースも少なくない。そうした現実がある中で、特別支援学校の先生方はどのような目標、最終的にどのような姿を目指して支援をされているのか、お聞きしたい。

●原氏

特別支援教育では「連携が重要だ」「連携・協働が大切だ」とよく言われる。もちろん、それはどの分野でもそうだが、ふと気付くと、「連携という名の排除」をしていないだろうかと思うことがあります。子どもを数字や結果だけで見てしまうと、「専門性

の高い福祉関係の支援につないだ方がよいのではないか」、「特別支援学校の方がよいのではないか」と考えがちになる。実際、そう思っている先生方もみえるだろうし、自分の学級経営がうまくいかないことをその子の特性だけの問題として考えてしまうこともあるかもしれない。結果として、「この子は特別支援学級へ行った方がよいのではないか」という話になる。それはある意味では連携かもしれない一方で、そこに排除の側面が含まれていることもあるのではないかと思う。では、それをどうしていくのかということにおいては、複雑な要因が絡んでいる。例えば、教員数が足りないことや、学級あたりの子どもの数の問題などもあるだろう。ただ、それらは制度上の課題である一方で、教員自身の考え方や子どもの見方を変えていかなければ、いつまで経っても同じことの繰り返しになるように思う。その点は、インクルーシブ教育を目指す流れがある中で、改めて考えていかなければならない課題だと思っている。今日私がお話ししたことの中で、子どもたちは「できる・できない」で見られることがとても多く、できないことが多いと、支援教育へどうぞという流れとなってしまう。そうした発想そのものが一つの大きな問題なのだろうと思う。

もう1点の、特別支援学校の目標について、もちろん法令に基づく教育目標はある。しかし、私は学校というものは何かを目指すだけの場所ではなく、「一緒に過ごす場所」であってもよいのではないかと思う。教育活動であるので、目標を設定し、その達成を目指そうとしがちだが、目標を目指すことが強くなり過ぎると、「これが必要なければいけない」「あれが必要なければいけない」という発想になってしまう。保護者の方も、「この子が生きていくためには、ある程度できるようにならなくてははいけない」と考えると、どこかに「目指さなければならない」という発想があるのではないだろうか。そういった意味で、私は、「過ごす」ということも大切だと思う。「過ごす」とは、この子と一緒に時間を過ごしていくということだ。そうなってくると、大きな目標や到達点を求めることだけでなく、保護者とともに、その子にとっての時間をつくっていくこと、新しいプログラムをつくっていくこと、そうしたことが必要なのではないだろうか。特別支援学校もまた、そうした役割を持つ場所であってよいと思っている。もっと言えば、保護者や子どもを信頼し、「人と関わることは悪くないよ」「社会って楽しいんだよ」ということを伝えていくことに役割があると思う。社会に向かう勇気や、安心感といったものを育てていく場であることが特別支援学校だけではなく、学校全体に共通するものかもしれない。

●奥村委員

支援学校の大きな目標というのは、まさにそうしたところにあるのではないかと改

めて感じた。重度の障がいがあり、言葉によるコミュニケーションが難しい子どももいるが、大人になるまでの過ごし方や関わり方によって、人との関わり方や生活の仕方にも違いが出てくるのかもしれない。

●原氏

支援学校では、ともすると目標達成や評価に引っ張られた指導になりがちだが、卒業後の生活を考えたとき、その学校での過ごし方は、その後の施設や地域での生活にも大きな影響を与えるのだから、子どもたちがどのような人として育っていくのかという視点がとても重要だと思う。

●小森委員

先生のお話を伺い、特別支援教育というのは特別なものではなく、一人ひとりの教育的ニーズに応じる教育であること、その出発点は子どもの心を受け止めることにあるということを教えていただいた。一方で、現状としては、その理想との間にねじれも生じているという問題意識も示していただいたかと思う。

先ほど奥村委員のお話にもあったように、「この子には卒業するまでにこういう力を身につけてほしい」「この力がないと社会に出てから難しいのではないか」という考え方が家庭にもあり、学校でも力をつけることが重要だという方向へ向かってしまう部分もあるのだろうと思う。前提として、まずは子どもの心を受け止めることが大切であるのだが、その部分の理解がおろそかになりがちなのではないだろうか。また、学校訪問の際に、支援学級のお子さんの保護者の方とお話しする機会もあるが、そこで感じることは、「何ができたか、できなかったか」という尺度で子どもを評価してしまう現実があるということである。そうした中においては、共に過ごすことが大切だということを本人や家庭にどう理解していただくのかという点も課題ではないか。

お話の中で、「受け止める」と「受け入れる」は異なるという整理が示されていた。まずは受け止め、その上で受け入れるかどうかは別の問題で、要望を受け入れないことは、必ずしも子どもの気持ちを受け止めていないということではないと家庭においても理解いただかないと、子どもを共に育てることは難しいと思う。しかし、現実には、「受け入れてもらえなかった」とことと、「受け止めてもらえなかった」ことが同じように受け取られてしまうことがあり、学校現場でも難しい対応を迫られる場面があるのではないかと思う。そこで、「受け止める」という段階と、「受け入れる・受け入

れない」という段階は別であるということを、家庭や保護者に理解していただくためには、どのようなコミュニケーションが求められるのか教えていただきたい。

また、本日の内容は、特別支援教育に限らず通常学級においても取り入れていくべきことだと思うが、現実には先生方が把握すべき児童生徒数も多く、一人ひとりの心を受け止め、寄り添うということが非常に難しい状況もある。もちろん制度的な課題もあると思うが、そのような状況の中で、教えていただいたような実践を進めていくためには、どのような工夫が必要なのだろうか。

●原氏

基本的に教員がどう思っているのかが問われる。教員が思いを持っていなければ伝えられないので、教員自身が自分は何を大事にしてる教員なんだろうかと探らなければいけない。例えば、何かができるようになることだけを大事にしていると、心が大事だとは言えないわけである。教員自身がまず考えなければいけないということと、とにかく効率的に能率よくできるだけ短い期間で目標達成が望まれる時代にあって、その子と過ごす時間を大切にする子育てをしていくわけであるから、時間をかけるしかない。親御さんと何回もお話をしながら、関わってもらえることが、1年後、1年半後に親御さんが変わっていくということに繋がっている例はいくつもあ

る。

コスパを重視し、短い時間で完結させるという時代であるので、それを気にする先生方も多いと思う。だが、この話はそれとは全然異なり、子どもが満足するために時間をかけていく必要があるということだ。大人や先生と関わって気持ちを満足していくというのは、車にガソリンを入れて満タンになるというようなこととは違う。人間はいつもいつも満タンにする必要がないというか、例えば毎日クラス30人の子どもたちと話しても満タンにはならない。でも、人間は満足する経験があると、それを土台にして、もう少し頑張ることができる。そういった経験は月に1、2回しかないかもしれないが、実はそれがエネルギーになってもっと今日も生きていく、明日も学校が楽しみになるというところがある。そういった経験を一緒に過ごしていくということがやはり重要であり、そのためには時間をかけて行う必要があると思う。

●岡本委員

特別支援に限らず、際立った個性を持つ子たちが非常に増えてきている中で、子どもたちに対して、特別支援学校だけではなく通常学級でも様々な対応をしていかなけ

ればいけない時代だということを理解した。自分の子育て時代を振り返ると、上の子を見ながら下の子を見ているときは、まさに間主観的理解をしていた。先生が児童生徒一人ひとりにそこまでの理解をすることはなかなか難しいと思うが、子どもたちに対する間主観的理解力を育むためには、時間をかけて関わりを増やすことの他に、必要なことがあればご教示願いたい。

●原氏

その点に絞った事例検討、検討会といったものは自分1人ではできないので、複数人で考えることが必要だろう。その次の方法としては、私も導入している、鯨岡先生が考案したエピソード記述というものがある。単なる事実だけを記録するのではなく、この子はなぜこんなことをしたのだろうか、どんな思いなんだろうかということ踏まえ、教員は何を思い、何を言ったか主観的に記述していく方法である。ある意味教員の訓練的なイメージを持たれるかもしれないが、岡本委員の子育ての事例のように、誰もが子どもに気持ちをもって接しているはずだ。学校の先生たちは、できないという点で見なければいけない部分もあり、本来すべきことが後回しになってしまうこともあるから、それを発露させるための方法でもある。

例えば、授業中に子どもが間違った答えを出した際には先生は間違いを指摘しなければいけないが、「そういう考えをしたのか。その考えは先生には無かったな」といったように授業を進めると、子どもにとっては否定されていないわけである。授業が終わった際には、間違っていたことはわかるわけだから、子どもに「どう？わかった？」というような声かけをするというような、まさに教員の心持ちや姿勢が大事になってくる。だとすれば、場面に応じた言葉かけのテクニックやいわゆるマニュアルのようなものを使うのではなく、気持ちを持ちだした小さなやりとりの繰り返し、集団を変えていくことになるのだろうなということも、実践からも感じている。

●伊藤委員

今後私どもが目指していく教育の姿は、障がいのある子どもを支援する教育から、その子が幸せな人生を歩み、楽しいと思える過ごし方ができるような、応じる、伴走できる教育ではないかと思っており、子どもたちの心を育てていくことが一番大切だと感じている。自己肯定感についてのお話は、これまでの会議でも出てきている話題ではあるが、個人的にできなかったことができるようになることが自己肯定感に繋が

るという覚えが強かったと自省している。今回お話をお聞きして、思いきり活動を楽しんでいることも自己肯定感を高め、さらには大人の良い映し返しが自己肯定感になっていくことを理解した。大人の映し返しという言葉が、今回キーワードとして受け止めたが、この話を現場の先生や家庭にもつなげていきたいと思い、より分かりやすい表現があれば教えていただきたい。

●原氏

時々、誤解があるのだが、原先生は子どもができるようにならなくてもいいのかといわれる。もちろんできるようになることも重要だが、教育において大切な事は、結果だけ見るのではなく、その間のプロセス、やり取りがあって、気持ちが生まれてくるということだ。それを分かりやすく表現できるようなフレーズを考えていきたい。

●教育長

特別支援のお話を聞く際に、いつも思うのは全ての子どもが自らの可能性を伸ばせる教育を考えていくことが必要だと思っている。特に、特別支援教育は社会的自立という言葉が大きく見えるので、通常の学校とも同じだが、できた方がよいからトレーニングも必要だという考えがあり、トレーニングを通して子どもたちができることを増やしていけば子どもたちは幸せになっていくだろうという公式で学校教育が動いてしまうことに釘をさしていただいたと思う。鯨岡先生と一緒に研究をされているということで、目指すのではなく過ごすことを充実させ、充実した日々を過ごすことの積み重ねに未来があるということを先生はおっしゃってくださったのだろうと思っている。

そう思うと、特別支援教育こそ、もっと45分が楽しくて仕方ないというようなカリキュラムを磨き上げていくことが必要で、特別支援の子どもたちを育てていくことになるのではないかと強く思っている。例えば、ダウン症の音楽が好きな子は、1週間の学校生活で音楽の時間がもっとあってもいいだろうと思う。アートや音楽を行いながら、実は自分の足りないと思われているようなところのトレーニングも重ねていくような設計ができたらいと思うし、特別支援教育の中でそういったことが強調されてくると、教育全体ももう少しカラーリングが変わってくるかと思う。本当に自分の得意なことやとんがっている部分を見抜く力、とんがっている部分を認める力に着目していくと、子どもの教育全体も変わっていくかもしれないと思いながら聞かせてい

ただいた。

●原氏

全体をバランスよく、凹んでいる部分を上げていくという発想は、平均に近づけるという発想であり、訓練的である。むしろ凸凹があるのが人間であるから、好きな何かを伸ばすと全体が伸びることはあるし、補い合うこともある。そもそもそういった活動をする時間が好きであれば、そこに行きたくなるということで、好循環につながっていく可能性も含んでいると思う。

●益子委員

従来の学校の授業研究会では、児童生徒の学びに焦点が当てられ、間主観的な議論が行われたと聞いている。しかし現在は時間的制約もあり、従来のような授業研究会と同様の議論を展開することが難しい現状がある。教師にとって特別支援の担当を経験することは、このような現状を踏まえれば、自分自身の児童生徒理解能力の向上、特に個体能力発達観から関係論的発達観へ考え方を転換することに寄与しているのだと考えた。

●市長

人間とは何だろうかという、非常に深いお話をしてくださったと思う。養護の働きと教育の働きについて、委員の皆様方同様、私も関心を持ってお聞きしていた。その中で、気持ちに付き合ってもらえないことが養護の働きを弱体化させ、自分の存在のあやふやさにつながっているということで、子どもたちが気持ちに付き合ってもらえていない状況が社会の中で増えているのではないかと感じている。

岐阜公園でイベントがあった際、子どもたちが色々な体験コーナーや物販を自分たちで考え準備して行ったのだが、関わった企業の方のお話では保護者の方の関与が多かったとのことである。手取り足取り、何でもこうした方がいいと言われることで、子どもたちが萎縮して何も言わなくなってしまうので、企業の方は、自分たちで考えてやってみようと言った結果、子どもたちが生き生きとしてお客さんを呼び込み、結果として大変盛況だったとのことだ。

親としては、子どもと関わっているつもりなのだが、事前に失敗しないように先回

りして、あれは駄目、これも駄目と、結果的に子どもたちからすると気持ちに付き合ってもらえていない状況にある。このキーワードが私の中では刺さっており、自分の存在があやふやで、自分の言葉で自分の思いをみんなの前で自己開示して表現することが、苦手な子どもたちがいる現状にあるのではないかと思う。だから、これは特別支援教育のベースではあるが、あらゆる子どもたちにとって、子どもたちの気持ちに親も地域も学校も付き合うことは子どもたちのこの自己肯定感を育むうえで大事なことでと改めて気付かされた。また、まさに自己肯定感を育む点において、自分を認めてくれる他者によって自分が認められ、自信や自己肯定感を育てることは、岐阜市の教育大綱の考え方と通ずる点がある。「自由の相互承認の感度を高める」ことも、まさに自分を見た者が認めてくれることで、自分も他者を認めるということで、互いに認め合うという私達が大切にしてきた教育の基本的な方針であり、私達は子どもたちにこういったこの社会や学びの機会をしっかりと提供していかなければいけないと改めて感じさせられたところだ。先ほど保育現場の子どものチェックといったお話もあったが、まさにそれが人間の素晴らしさであり、営みでもある。お互いに言葉を発してなくても、アイコンタクトで十分に伝わる心のやり取りが私達の人生を豊かにし、子どもたちの色々な感性を発露させていくのだらうと思うので、今日いただいたご示唆を大切にしながら、今後の議論に活かしていきたい。